

# 就業状態別にみた高齢者の生活時間の実態 (1)

—男性について—

関根 美貴

## 1. はじめに

本研究では、高齢者の生活時間の実態について考察する。

高齢者の生活時間に関する近年における先行研究としては、三富（2006）の主に余暇時間に焦点を当てた分析や、小林（2010）のわが国と韓国の比較分析などがあげられるが、その数はあまり多くはない。特に性別や年齢階級以外の属性にも着目した研究は熊澤（2003）の独居後期女性高齢者の分析などがあげられるものの、筆者の知る限り少ない。現在わが国の 65 歳以上の高齢者は総務省「人口推計」(2010)によると 2940 万人にも達しており、総人口の 23.1%を占めるに至っている。そしてその属性は多様で、一括りにできるものでない。それゆえ高齢者の属性に着目した分析は有意義であるといえるだろう。

そこで本研究では、高齢者の生活時間についてこれまでも考慮されてきた性別、年齢階級に加えて他の属性、特に就業状態に着目した分析を行っていく。これは総務省「労働力調査」(2010)によれば、65～69 歳階級の労働力人口比率は男性で 48.9%、女性で 27.4%と高い比率となっているのはもちろん、70 歳以上でも男性で 19.6%、女性で 8.4%と無視できない比率を示しているためである。第 1 報である本稿ではまず男性についてとりあげる。続く第 2 報では女性について分析する。もちろん考慮すべき属性は他にも世帯類型や子どもの有無、婚姻状況などがあげられるが、これらについての分析も今後順次行っていく。

本研究ではまず、該当する種類の活動をしなかった人を含む全員の平均である総平均時間について考察する。ついで、該当する種類の活動を行った人のみについての平均である行動者平均時間や行動者率を用いて、より詳細にみていく。これは総平均時間が変化したのは、行動者の平均時間が変化したことによるものなのか、行動者率が変化したことによるものなのかをみていくことで、平均の意味を再考するためである。

なおここでは有業であるか無業であるかといった就業状態の違いに着目するため、65 歳以上の高齢者だけでなく、多くの雇用者が定年を迎える 60 歳以上を分析対象とする。また 80 歳代以上の標本数が少ないこともあり、本研究では特に言及しない限り、60 歳代から 70 歳代を中心にみていくこととする。用いた資料は総務省「社会生活基本調査」(2006)である。

## 2. 総平均時間について

### 2.1 総数について

まず有業者、無業者をあわせた総数における1次活動、2次活動、3次活動の年齢階級別総平均時間についてみていこう。なお1次活動とは、睡眠、食事など生理的に必要な活動を指し、2次活動とは、仕事、家事など社会生活を営む上で義務的な性格の強い活動を指す。3次活動は、1次活動、2次活動以外で各人が自由に使える時間における活動のことである。

表1を用いて60～64歳階級の1日の生活時間（週全体平均、以下同様）の配分をみよう。1次活動に配分される時間は1日に650分、2次活動に344分、3次活動に446分となっている。65～69歳階級では、1次活動に673分、2次活動に248分、3次活動には519分配分されている。さらに70～74歳階級では1次活動に694分、2次活動に195分、3次活動に551分となっており、75～79歳階級では1次活動に725分、2次活動に152分、3次活動には563分配分されている。いずれの年齢階級においても最も多く時間を配分しているのが1次活動で、次に3次活動となっている。しかしその配分は年齢階級によって異なっている。そこで高齢者の生活時間配分が、年齢階級の上昇とともにどのように変化するかを知るために、1つ前の年齢階級との差(当該年齢階級の値－1つ前の年齢階級の値、以下同様)についてみていこう。なお本研究では、高齢者間における比較に主眼を置いているため、60～64歳階級と現役世代である55～59歳階級との比較は行っていない。60～64歳階級に比べて65～69歳階級は、2次活動が－96分とかなり少なくなっている。その分1次活動が+23分、3次活動は+73分と増加している。65～69歳階級に比べて70～74歳階級では、2次活動が－53分と減少している。これに対して1次活動が+21分、3次活動は+32分と増加している。75～79歳階級では70～74歳階級に比べて2次活動が－43分と減少している。これに対して1次活動が+31分、3次活動は+12分増加している。

このように年齢階級の上昇とともに、2次活動に配分される時間は減少している。特に65～69歳階級においては1つ前の年齢階級に比して大幅に減少しているといえるだろう。また2次活動の減少時間分のうち3次活動に配分される比率を算出してみると、65～69歳階級では76%、70～74歳階級では60%、75～79歳階級では28%と、年齢階級が上がるにつれて、特に75～79歳階級で大きく低下し、1次活動に配分される比率が上昇していくことが分かる。

2次活動及び3次活動の主な項目についてみていこう。2次活動のうち仕事等（通勤時間、仕事の合計）に配分される時間は60～64歳階級で296分、65～69歳階級で187分、70～74歳階級で123分、75～79歳階級で76分となっている。75～79歳階級は60～64歳階級の約4分の1にしかならず、大きく減少している。しかし1つ前の年齢階級との差をみると、65～69歳階級で－109分、70～74歳階級で－64分、75～79歳階級で－47分となっており、減少幅については年齢階級の上昇とともに小さくなっていくことが分かる。家事関連（家事、介護・看護、育児、買い物の合計）に配分される時間は60～64歳階級で47分、65～69歳階級で61分、70～74歳階級で71分、75～79歳階級では75分となっている。75～79歳階級は60～64歳階級の約1.6倍に

表1 年齢階級別・就業状態別にみた総平均時間（男性）

単位：分

	1次活動	2次活動	仕事等	家事関連	3次活動	休養的自由 時間活動	積極的自由 時間活動	他の3次活 動
<b>総数</b>								
60～64歳	650	344	296	47	446	276	90	81
65～69歳	673	248	187	61	519	316	111	92
70～74歳	694	195	123	71	551	353	106	92
75～79歳	725	152	76	75	563	377	95	91
80～84歳	749	127	53	73	564	414	66	84
85歳以上	791	81	31	49	568	435	46	87
<b>有業者</b>								
60～64歳	639	441	409	32	361	233	62	65
65～69歳	658	385	346	39	397	247	74	76
70～74歳	681	358	316	42	401	272	61	69
75～79歳	705	311	266	45	424	301	55	69
80～84歳	724	297	256	41	419	320	40	59
85歳以上	742	238	207	31	459	377	39	42
<b>無業者</b>								
60～64歳	678	98	10	88	664	388	160	116
65～69歳	691	95	10	84	654	390	156	109
70～74歳	702	98	9	87	640	402	133	107
75～79歳	733	94	8	85	614	406	109	100
80～84歳	755	87	8	80	598	435	73	89
85歳以上	797	59	7	52	583	444	48	92

資料：総務省「社会生活基本調査」（2006）

なっているが、1つ前の年齢階級との差をみると、65～69歳階級で+14分、70～74歳階級で+10分、75～79歳階級で+4分と年齢階級の上昇とともに増加幅が小さくなっていることが分かる。同じ2次活動ではあるが、仕事等に配分される時間は年齢階級の上昇とともに減少し、家事関連は増加するといった異なった動きがみられる。しかし、その変化の幅はいずれも年齢階級の上昇とともに小さくなっていくことが分かった。

3次活動のうち休養的自由時間活動（テレビ・ラジオ・新聞・雑誌、休養・くつろぎの合計）は、60～64歳階級で276分、65～69歳階級で316分、70～74歳階級で353分、75～79歳階級で377分と年齢階級が上がるとともに増加していく。1つ前の年齢階級との差をみると65～69歳階級で+40分、70～74歳階級で+37分であるのに対し、75～79歳階級で+24分と年齢階級の上昇とともに増加幅がやや小さくなっていることが分かる。積極的自由時間活動（学習・研究（学業以外）、趣味・娯楽、スポーツ、ボランティア活動・社会参加活動の合計）は60～64歳階級で90分、65～69歳階級で111分、70～74歳階級で106分、75～79歳階級で95分となっている。1つ前の年齢階級との差をみていくと、65～69歳階級では+21分と増加しているが、70～74歳階級で-5分、75～79歳階級では-11分と70歳代になると減少に転じ、その変化の幅は年齢階級の上昇とともにやや大きくなっていることが分かる。なお他の3次活動（移動（通勤・通学を除く）、交際・付き合い、受診・診療、その他の合計）は60～64歳階級で81分、65～69歳階級で92分と増大するが、その後70～74歳階級で92分、75～79歳階級で91分とほぼ横ばいとなっている。以上のように3次活動についても活動の種類によって、時間配分の年齢階級による変化に異なる特徴が認められることが分かった。

## 2.2 有業者について

次に就業状態別に総平均時間をみていこう。まず有業者についてである。

資料として用いた「社会生活基本調査」（2006）の標本における有業者の総数に対する比率は、60～64 歳階級で 72.6%，65～69 歳階級で 54.9%，70～74 歳階級で 41.1%，75～79 歳階級で 30.5%となっている。

60～64 歳階級において 1 次活動に配分される時間は 639 分、2 次活動は 441 分、3 次活動は 361 分となっている。65～69 歳階級では 1 次活動には 658 分、2 次活動に 385 分、3 次活動に 397 分配分されている。70～74 歳階級においては 1 次活動に 681 分、2 次活動に 358 分、3 次活動に 401 分となっており、75～79 歳階級では 1 次活動に 705 分、2 次活動に 311 分、3 次活動に 424 分配分されている。最も多く配分されているのは、いずれの年齢階級においても 1 次活動であるが、60～64 歳階級では 2 次活動が 2 番目に多く配分され、65～69 歳階級以降の年齢階級では 3 次活動が 2 番目に多く配分されており、年齢階級によって異なった特徴がみられる。1 つ前の年齢階級との差をみていこう。65～69 歳階級は 60～64 歳階級に比べて 2 次活動が -56 分と減少している。その分 1 次活動が +19 分、3 次活動が +36 分と増加している。70～74 歳階級では 1 つ前の年齢階級に比べて、2 次活動が -27 分と減少している。その分 1 次活動が +23 分、3 次活動が +4 分と増加している。75～79 歳階級では 1 つ前の年齢階級に比べて、2 次活動が -47 分と減少している。これに対し 1 次活動が +24 分、3 次活動が +23 分と増加している。このように有業者のみを対象としても、2 次活動に費やす時間は年齢階級の上昇とともに減少しており、2 次活動時間の減少分に代わって配分される 1 次活動、3 次活動の時間や割合は年齢階級によって異なったものとなっていることが分かるだろう。

2 次活動、3 次活動における主な項目についてみていこう。2 次活動のうち仕事等に配分される時間は 60～64 歳階級で 409 分、65～69 歳階級で 346 分、70～74 歳階級で 316 分、75～79 歳階級で 266 分と年齢階級の上昇とともに減少していることが分かる。これを 1 つ前の年齢階級との差をみると、65～69 歳階級で -63 分、70～74 歳階級で -30 分、75～79 歳階級で -50 分と減少していることが分かる。その減少幅は 65～69 歳階級で大きく、70～74 歳階級で小さくなるものの、75～79 歳階級で再び大きくなる。家事関連について配分される時間は 60～64 歳階級で 32 分、65～69 歳階級で 39 分、70～74 歳階級で 42 分、75～79 歳階級で 45 分となっている。1 つ前の年齢階級との差をみると 65～69 歳階級で +7 分、それ以降の年齢階級では +3 分と少しずつ増加していることが分かる。

3 次活動についてみていこう。休養的自由時間活動は、60～64 歳階級で 233 分、65～69 歳階級で 247 分、70～74 歳階級で 272 分、75～79 歳階級で 301 分と年齢階級の上昇とともに増加している。1 つ前の年齢階級との差をみると、65～69 歳階級で +14 分、70～74 歳階級で +25 分、75～79 歳階級で +29 分となっており、年齢階級とともに増加幅は大きくなっていることが分かる。積極的自由時間活動については、60～64 歳階級で 62 分、65～69 歳階級で 74 分、70～74

歳階級で 61 分、75～79 歳階級で 55 分となっている。1 つ前の年齢階級との差をみると 65～69 歳階級で +12 分と増加するものの、その後 70～74 歳階級で -13 分、75～79 歳階級で -6 分と減少する。このように同じ 3 次活動でも、休養的自由時間活動と積極的自由時間活動では、その年齢階級に伴う変動に異なる傾向がみられることが分かった。特に休養的自由時間活動の増加幅は総数で見たときと異なった動きをしていることが分かった。

## 2.3 無業者について

次に無業者についてみていこう。

60～64 歳階級の 1 日の生活時間配分は 1 次活動に 678 分、2 次活動に 98 分、3 次活動に 664 分となっている。65～69 歳階級では 1 次活動に 691 分、2 次活動に 95 分、3 次活動に 654 分配分されている。70～74 歳階級の配分は 1 次活動に 702 分、2 次活動に 98 分、3 次活動に 640 分となっている。75～79 歳階級では 1 次活動に 733 分、2 次活動に 94 分、3 次活動に 614 分配分されている。1 つ前の年齢階級との差をみていこう。なおここでは活動別にみていく。2 次活動は 65～69 歳階級においてもそれ以降においても 1 つ前の年齢階級との差は数分程度でほとんどみられない。しかし 3 次活動は 65～69 歳階級では 1 つ前の年齢階級に比べて -10 分と減少しており、70～74 歳階級では -14 分、75～79 歳階級では -26 分の減少とその幅は徐々に大きくなっていることが分かる。これに対し 1 次活動は 65～69 歳階級で +13 分、70～74 歳階級では +11 分、75～79 歳階級では +21 分と増加がみられ、75～79 歳階級での増加がやや大きくなっていることが分かる。

このように無業者のみについてみていくと、2 次活動の時間にはほとんど変化がみられないにもかかわらず、3 次活動は一貫して減少しており、年齢階級の上昇とともに徐々にその減少幅も大きくなっていることが分かる。これは加齢による影響ととらえることができるだろう。

次に同一年齢階級の有業者と無業者の比較を行おう。60～64 歳階級において、有業者に比べて無業者では 2 次活動に配分される時間が 343 分も少ない。これに対し、1 次活動には 39 分、3 次活動には 303 分も多く配分されている。65～69 歳階級においては有業者に比べて無業者では 2 次活動に配分される時間が 290 分少なくなっており、60～64 歳階級よりもその差はやや縮まっている。1 次活動には 33 分、3 次活動には 257 分も多く配分されている。70～74 歳階級についても同様の傾向がみられ、有業者に比べて無業者では 2 次活動に配分される時間が 260 分少なくなっており、さらに 1 つ前の 65～69 歳階級よりもその差はさらに縮まっている。1 次活動には 21 分、3 次活動には 239 分多く配分されている。75～79 歳階級では 2 次活動に配分される時間は無業者のほうが有業者よりも 217 分短く、70～74 歳階級よりもその差はさらに縮まっている。また 1 次活動には無業者のほうが 28 分多く、3 次活動は 190 分多く配分されている。このように有業者と無業者の 2 次活動に配分される時間の差は年齢階級の上昇とともに縮まっており、それに伴って 3 次活動に配分される時間の差も縮まっているようみえる。これを確かめるため、同一年齢

階級における有業者と無業者間の3次活動の時間の差を2次活動の時間の差で割った比率を算出したところ、いずれの年齢階級においても88～92%もの高い値となった。これより有業者において2次活動に配分されていた時間については、無業者においては3次活動に配分される比率が高く、この値には年齢階級による変動があまりみられないことが分かった。

次に無業者の2次活動及び3次活動の主な項目についてみていこう。

2次活動のうち、仕事等に配分される時間は60～64歳階級で10分、65～69歳階級でも同じく10分、70～74歳階級では9分、75～79歳階級では8分となっており、どの年齢階級においても非常に少なく、ほとんど差はみられない。家事関連は、60～64歳階級で88分、65～69歳階級で84分、70～74歳階級で87分、75～79歳階級で85分となっており、1つ前の年齢階級との差は数分にとどまっている。

3次活動のうち休養的自由時間活動は、60～64歳階級で388分、65～69歳階級で390分、70～74歳階級で402分、75～79歳階級で406分と年齢階級の上昇とともに増加している。1つ前の年齢階級との差をみていくと、65～69歳階級で+2分、70～74歳階級で+12分、75～79歳階級で+4分となっており、70～74歳階級を除き増加幅はほぼ一定である。

積極的自由時間活動は、60～64歳階級で160分、65～69歳階級で156分、70～74歳階級で133分、75～79歳階級で109分と減少していく。なお80～84歳では73分と大きく減少している。1つ前の年齢階級との差をみると、65～69歳階級で-4分であるが、70～74歳階級では-23分、75～79歳階級では-24分と70歳代になって急激に減少幅が大きくなっていることが分かる。

同一年齢階級の有業者と無業者を比較してみよう。項目ごとにみていこう。

2次活動のうち、仕事等に配分される時間は60～64歳階級で399分、65～69歳階級で336分、70～74歳階級で307分、75～79歳階級で258分、いずれも有業者に比べて無業者において短くなっている。しかしその差は年齢階級の上昇とともに徐々に縮まっていることが分かる。これは無業者では年齢階級間に配分時間の大きな差がみられないのに対して、有業者では年齢階級の上昇とともに配分時間が減少していくことが影響している。家事関連に配分される時間は、60～64歳階級では56分、65～69歳階級では45分、70～74歳階級では45分、75～79歳階級では40分、無業者のほうが有業者よりも長くなっている。年齢階級の上昇とともに差がやや縮まっていくのは、有業者の配分時間が長くなることによるものである。

3次活動のうち、休養的自由時間活動に配分される時間は60～64歳階級では155分、65～69歳階級では143分、70～74歳階級では130分、75～79歳階級では105分、無業者のほうが長くなっている。年齢階級の上昇とともに差が縮まっていくのは、有業者、無業者ともに年齢階級の上昇とともに配分時間が増加するが、増加幅が有業者では年齢階級の上昇とともに大きくなっていくのに対して、無業者ではほぼ一定であるといったことが影響していると思われる。またこのような増加幅の違いは、2次活動の配分時間の減少が有業者にはみられるが、無業者にはみられないことと関係していると思われる。

積極的自由間活動に配分される時間は、60～64歳階級では98分、65～69歳階級では82分、70～74歳階級では72分、75～79歳階級では54分、無業者のほうが長くなっているが、その差は年齢階級の上昇とともに小さくなっている。これは無業者においては配分時間が年齢階級の上昇とともに減少していくのに対して、有業者では60歳代では増加、70歳代でも無業者よりも減少幅が小さいことによる。

有業者との仕事等の時間の差を無業者はどのように配分しているのかを知るために、先述の2次活動全体と同様に同一年齢階級の有業者と無業者の仕事等の時間の差を分母として比率を算出した。この値には年齢階級による大きな差異はみられず、いずれも1次活動に10%前後、家事関連に15%前後、3次活動に75%前後を配分していることが分かった。3次活動の積極的自由時間活動と休養的自由時間活動はそれぞれ25%、40%前後であるが、75～79歳階級の積極的自由時間活動が20%前後しか振り分けられておらず、やや小さいといった特徴がみられる。

これらより有業者及び無業者の生活時間配分を合わせて考えると、総数において3次活動の時間が年齢階級の上昇とともに伸びているのは、高齢者全員が3次活動の時間を伸ばしているからではなく、当該年齢階級における無業者の割合が増加するためであると推察されるだろう。

また個人のレベルでみると、仕事からの引退によって、大幅に生活時間配分が変化することが推察される。もちろんそれだけでなく、加齢による変化も、特に75歳以上の後期高齢者と呼ばれる年齢において見逃せないことが分かるだろう。

### 3. 行動者率、行動者平均時間について

#### 3.1 総数について

より詳しく分析するために、行動者率及び行動者平均時間について表2～3を用いてみていこう。行動者平均時間は行動者数を分母にしているため、各項目について単純に足しあわせることはできないことに留意が必要である。そこでここでは1次、2次、3次活動の代表的な項目についてみていくこととする。

まず総数についてみていこう。1次活動は当然であるがほとんど100%の行動者率である。それゆえ行動者平均時間を改めてみる必要はないといえる。

2次活動についてみよう。仕事の行動者率は60～64歳階級で55.6%、65～69歳階級で40.7%、70～74歳階級で30.3%、75～79歳階級で22.3%と年齢階級の上昇とともに低下していく。仕事の行動者平均時間についても、60～64歳階級で470分、65～69歳階級で418分、70～74歳階級で382分、75～79歳階級で329分と年齢階級の上昇とともに減少していることが分かる。これより総平均時間の急激な減少は、行動者の比率が低下していることと行動者の平均時間の減少が同時に起こっているためであることが分かる。家事についてみていこう。家事の行動者率は60～64歳階級で23.3%であるが、65～69歳階級では29.6%、70～74歳階級では32.7%、75～79

表2 年齢階級別・就業状態別にみた行動者率（男性）

単位：％

	1次活動	2次活動	仕事	家事	3次活動	テレビ・ラジオ・新聞・雑誌	休養・くつろぎ	趣味・娯楽	スポーツ
<b>総数</b>									
60～64歳	100.0	82.0	55.6	23.3	98.3	86.9	64.5	29.2	17.1
65～69歳	100.0	75.0	40.7	29.6	99.0	90.8	66.3	33.9	23.1
70～74歳	100.0	70.2	30.3	32.7	99.1	92.4	68.1	34.6	22.9
75～79歳	100.0	64.9	22.3	34.2	99.2	92.7	72.3	32.2	20.2
80～84歳	100.0	59.0	17.7	36.4	99.5	92.0	71.3	24.8	15.1
85歳以上	100.0	43.3	12.7	25.6	99.3	87.3	73.2	20.2	9.8
<b>有業者</b>									
60～64歳	100.0	88.8	75.7	16.9	97.7	84.8	64.6	22.2	11.9
65～69歳	100.0	87.7	73.2	20.2	98.5	87.8	65.6	23.9	15.9
70～74歳	100.0	88.0	74.4	21.9	98.2	87.8	67.1	22.8	12.8
75～79歳	100.0	86.6	72.3	21.9	98.7	91.2	73.5	19.0	11.5
80～84歳	100.0	87.5	75.8	21.8	99.1	90.7	72.1	15.6	9.1
85歳以上	100.0	88.2	79.8	19.0	99.3	93.9	61.7	13.5	12.0
<b>無業者</b>									
60～64歳	100.0	64.6	3.9	39.8	99.9	92.2	64.5	47.2	30.5
65～69歳	100.0	60.7	4.1	40.4	99.6	94.0	67.2	45.7	31.5
70～74歳	100.0	59.7	4.0	39.2	99.8	95.2	68.9	41.5	29.0
75～79歳	100.0	56.7	4.2	38.5	99.4	93.1	72.1	37.4	23.4
80～84歳	100.0	52.2	4.3	39.8	99.6	92.2	71.0	27.0	16.7
85歳以上	100.0	37.3	3.3	26.9	99.3	86.3	74.9	21.4	9.6

資料：表1に同じ。

表3 年齢階級別・就業状態別にみた行動者平均時間（男性）

単位：分

	1次活動	2次活動	仕事	家事	3次活動	テレビ・ラジオ・新聞・雑誌	休養・くつろぎ	趣味・娯楽	スポーツ
<b>総数</b>									
60～64歳	650	413	470	109	453	229	120	182	123
65～69歳	673	328	418	117	524	256	127	184	127
70～74歳	694	276	382	133	556	279	140	180	114
75～79歳	725	233	329	137	567	287	154	176	106
80～84歳	749	215	296	137	567	311	179	167	92
85歳以上	791	186	247	136	572	319	214	159	89
<b>有業者</b>									
60～64歳	639	486	474	91	369	192	107	155	118
65～69歳	658	434	427	98	403	203	106	161	121
70～74歳	681	403	396	114	408	211	128	144	116
75～79歳	705	359	349	127	430	224	130	156	93
80～84歳	724	337	324	121	422	234	147	131	94
85歳以上	742	267	254	109	465	287	162	145	84
<b>無業者</b>									
60～64歳	678	152	233	126	664	314	151	208	124
65～69歳	691	157	241	128	657	309	149	196	130
70～74歳	702	163	221	138	642	316	146	191	113
75～79歳	733	165	193	141	617	309	163	179	104
80～84歳	755	168	180	138	600	329	186	171	92
85歳以上	797	157	203	138	587	325	219	157	95

資料：表1に同じ。

歳階級で34.2%と、年齢階級が上がるにつれて徐々にその比率は上昇している。なお80～84歳階級では36.4%となっている。また行動者平均時間は60～64歳階級で109分、65～69歳階級で117分、70～74歳階級で133分、75～79歳階級で137分となっている。1つ前の年齢階級との差をみると65～69歳階級で+8分、70～75歳階級で+16分、75～79歳階級では+4分の増加となっている。これより家事は年齢階級が上がるとともに行動者率が徐々に上昇することと、行動者平均時間の増加の両方が、総平均時間を増加させている要因になっているといえるだろう。

3次活動についてみていこう。休養的自由時間活動の2項目のうち、より行動者率が高い項目はテレビ・ラジオ・新聞・読書である。この行動者率は、60～64歳階級で86.9%、65～69歳階級で90.8%、70～74歳階級で92.4%、75～79歳階級で92.7%とほぼ横ばいであり、年齢階級に



よる違いはあまりみられない。行動者平均時間は 60～64 歳階級が 229 分で、その後 256 分、279 分、287 分と徐々に増加していく。なお 80～84 歳階級では 311 分と 300 分を超える。積極的自由時間活動の中でいずれの年齢階級においても最も高い行動者率を示しているのが趣味・娯楽である。この行動者率は 60～64 歳階級で 29.2%、65～69 歳階級で 33.9%とやや上昇し、その後 34.6%、32.2%と 75～79 歳階級までほぼ横ばいとなる。なお 80～84 歳階級では 24.8%と減少する。行動者平均時間は 60～64 歳階級で 182 分、65～69 歳階級で 184 分、70～74 歳階級で 176 分、75～79 歳階級で 167 分と 70 歳代になって減少に転じる。スポーツの行動者率は 60～64 歳階級で 17.1%、65～69 歳階級で 23.1%とやや上昇する。その後、70～74 歳階級で 22.9%、75～79 歳階級で 20.2%とほぼ横ばいとなっており、趣味、娯楽と似通った動きをしている。行動者平均時間は 60～64 歳階級で 123 分、65～69 歳階級で 127 分、70～74 歳階級で 114 分、75～79 歳階級で 106 分と、この項目も 70 歳代で減少傾向がみられる。なお、積極的自由時間活動の学習・研究、趣味・娯楽、スポーツ、ボランティア活動・社会参加活動はいずれも行動者平均時間は 120 分から 180 分と長いことから、総平均時間とあわせて考えると個々の高齢者はこれらすべての活動を行っている人は少なく、いずれか 1 つもしくは 2 つくらいを行っているものと思われる。また積極的自由時間活動を何も行わない人も少なからずいることも推察される。

### 3.2 有業者について

次に有業者についてみていこう。

まず 2 次活動についてみよう。仕事の行動者率は 60～64 歳階級で 75.7%、65～69 歳階級で 73.2%、70～74 歳階級で 74.4%、75～79 歳階級で 72.3%とほぼ横ばいである。行動者平均時間は 60～64 歳階級で 474 分、65～69 歳階級で 427 分、70～74 歳階級で 396 分、75～79 歳階級で 349 分となっている。1 つ前の年齢階級との差をみると、65～69 歳階級で -47 分、70～74 歳階級で -31 分、75～79 歳階級で -47 分である。70～74 歳で減少幅がやや小さいものの、年齢階級の上昇とともに大きく減少していることが分かる。総平均時間のところでも述べたように、高齢者においては有業者であっても仕事に配分される時間は年齢とともに短くなっていくことが分かる。家事の行動者率は 60～64 歳階級で 16.9%であったものが 65～69 歳階級で 20.2%となり、70～74 歳階級、75～79 歳階級いずれも 21.9%とほぼ横ばいとなる。行動者平均時間は 60～64 歳階級で 91 分、その後 98 分、114 分と徐々に増加し、75～79 歳階級で 127 分と最大になる。有業者における家事関連の総平均時間が年齢階級とともに上昇するのは、60 歳代では行動者率の上昇と、行動者平均時間の増大の両方が、70 歳代では行動者平均時間の増大が関係していると推察される。

3 次活動についてみよう。休養的自由時間活動のテレビ・ラジオ・新聞・読書の行動者率は 60～64 歳階級で 84.8%、65～69 歳階級及び 70～74 歳階級で 87.8%、75～79 歳階級で 91.2%となっている。いずれの年齢階級においても高い値を示しており、さらに 70～74 歳階級を除き年齢

階級の上昇とともに少しずつ上昇する傾向がみられる。行動者平均時間は 60～64 歳階級で 192 分、65～69 歳階級で 203 分、70～74 歳階級で 211 分、75～79 歳階級で 224 分と徐々に増加している。これより、テレビ・ラジオ・新聞・読書を含めた休養的自由時間活動に対する有業者の時間配分が年齢階級の上昇とともに総平均時間が増加していくのは、行動者率及び行動者平均時間の両者ともに年齢階級があがるにつれて、少しずつではあるが上昇する傾向にあることが関係していると推察される。

積極的自由時間活動の趣味・娯楽の行動者率は 60～64 歳階級で 22.2%、その後 23.9%、22.8% ほぼ横ばいとなるが、75～79 歳階級では 19.0%と低下していく。行動者平均時間は、60～64 歳階級で 155 分、その後 161 分、144 分、156 分とあまり変化しない。スポーツの行動者率は 60～64 歳階級で 11.9%、65～69 歳階級で 15.9%、70～74 歳階級で 12.8%、75～79 歳階級で 11.5% となっており、65～69 歳階級が最も高くなっている。行動者平均時間は、60～64 歳階級で 118 分、65～69 歳階級で 121 分、70～74 歳階級で 116 分と、ほぼ横ばい状態であるが、75～79 歳階級で 93 分と減少する。積極的自由時間活動に関する時間配分は、項目によってその特徴がやや異なるが、行動者平均時間の変化はあまりみられないか、70 歳代後半までみられないことから、行動者率の変化が影響しているように推察される。

### 3.3 無業者について

無業者についてみていこう。

2 次活動のうち家事の行動者率は 60～64 歳階級では 39.8%で、その後 40.4%、39.2%、38.5% と 65～69 歳階級を除き、年齢階級の上昇とともにやや減少傾向にある。行動者平均時間は 60～64 歳階級で 126 分、その後 128 分、138 分と徐々に増加し、75～79 歳階級で 141 分と最大になる。このことから、家事関連の総平均時間が、年齢階級が上がるとともに増加するのは、年齢階級の上昇に伴ってほんの少しずつ行動者率が低下するものの、行動者平均時間の増加に相殺されるためであると推察されるだろう。

3 次活動についてみよう。休養的自由時間活動のテレビ・ラジオ・新聞・読書の行動者率は、いずれの年齢階級でも 90%以上で、ほとんどの人が行っていることが分かる。行動者平均時間は 60～64 歳階級においては 314 分、その後 309 分、316 分、309 分といずれの年齢階級でもほぼ同様の値となっている。なお 80～84 歳階級では 329 分と増加する。休養的自由時間活動の総平均時間は年齢階級の上昇とともにやや増加傾向がみられ、テレビ・ラジオ・新聞・読書の行動者率や行動者平均時間が年齢階級において差がみられないことと合致していない。そこで、もう一つの項目である休養・くつろぎについてみてみよう。この項目の行動者率は 60～64 歳階級において 64.5%で、その後 67.2%、68.9%、72.1%と徐々に上昇している。行動者平均時間は 60～64 歳階級で 151 分、65～69 歳階級で 149 分、70～74 歳階級で 146 分とほぼ横ばい状態にあり、75～79 歳階級で 163 分と増加する。このことより、総平均時間の年齢階級が上がるとともに総平均

時間が増加するのは、休養・くつろぎの行動者率の上昇と70歳代後半の行動者平均時間の増加が影響を与えているものと推察される。積極的自由時間活動の趣味・娯楽の行動者率は60～64歳階級で47.2%、その後45.7%、41.5%、37.4%と年齢階級の上昇とともに低下していく。なお、80～84歳階級で27.0%、85歳以上になると21.4%とさらに低下する。行動者平均時間は60～64歳階級で208分、65～69歳階級で196分、70～74歳階級で191分、75～79歳階級で179分と年齢階級が上がるにつれて短くなっていく。スポーツの行動者率は、60～64歳階級で30.5%、65～69歳階級で31.5%、70～74歳階級で29.0%とほぼ横ばいであるが、75～79歳階級で23.4%と低下する。行動者平均時間は60～64歳階級で124分、65～69歳階級で130分、70～74歳階級で113分、75～79歳階級で104分と65～69歳階級で最も長くなるが、その後低下する。無業者の積極的自由時間活動に関する項目については、行動者平均時間が年齢階級の上昇とともに減少していく傾向がみられ、有業者においてあまり変化しなかったことと異なった特徴を示している。もちろん後述のように行動者平均時間そのものは無業者のほうが長い。

同一年齢階級における有業者と無業者の違いについてみていこう。

2次活動のうち家事についてみると、行動者率はいずれの年齢階級においても無業者のほうが高く、年齢階級が下がるほど差がやや大きい。最も差が大きいのは60～64歳階級で22.9%ポイントの差となっている。行動者平均時間は60～64歳で35分ほど無業者のほうが長く、年齢階級の上昇とともに差が小さくなっていく。

3次活動についてみよう。テレビ・ラジオ・新聞・読書の行動者率については、いずれの年齢階級においても無業者の方が高いが、70歳代後半において有業者の行動者率が上昇するため、その差は縮小される。行動者平均時間は60～64歳で122分も無業者のほうが長い。しかし有業者の行動者平均時間が徐々に伸長するため、差は縮まっていくものの依然としてその値は大きい。趣味・娯楽の行動者率はいずれの年齢階級においても無業者の方が高く、60～64歳では、25%ポイントも差がある。最も差が小さい75～79歳でも18.7%ポイントとなっている。このように3次活動の行動者率は就業の状態が大きく影響しているといえるだろう。また行動者平均時間についてはいずれも無業者のほうが長く、60～64歳階級での差は53分であるが、75～79歳階級では23分と縮まる傾向がみられる。

#### 4. おわりに

本稿では、男性高齢者の生活時間について、これまでも考慮されてきた性別、年齢階級に加えて就業状態に着目した分析を行った。

本稿で明らかになったことをまとめておこう。

有業者の総平均時間については、2次活動のうち仕事等に配分される時間は60～64歳階級で409分であったものが、年齢階級の上昇とともに減少し、75～79歳階級では266分となる。その

減少幅は 65～69 歳階級で最も大きく、次いで 75～79 歳階級である。

家事関連については、60～64 歳階級では 32 分で、年齢階級の上昇とともに徐々に増加し、75～79 歳階級では 45 分となる。

3 次活動のうち休養的自由時間活動に配分される時間は、60～64 歳階級では 233 分で、年齢階級の上昇とともに増加し、75～79 歳階級では 301 分となる。その増加幅は年齢階級とともに大きくなっていく。これに対し、積極的自由時間活動は、60～64 歳階級で 62 分で、65～69 歳階級でやや増加するものの、その後減少に転じ、75～79 歳階級では 55 分となる。70～74 歳階級以降の減少幅は、年齢階級の上昇とともに減少している。

無業者の総平均時間については、2 次活動のうち、家事関連に配分される時間は 60～64 歳階級では 88 分と、有業者の同一年齢階級の値より 56 分長くなっている。また無業者については年齢階級による差異はほとんど認められず、75～79 歳階級の配分時間は 85 分である。

3 次活動のうち、休養的自由時間活動に配分される時間は 60～64 歳階級で 388 分と、有業者の同一年齢階級より 155 分長い。無業者については年齢階級の上昇とともに配分される時間が増加し、75～79 歳階級では 406 分となる。なお、年齢階級ごとの増加幅はほぼ一定であった。積極的自由時間活動に配分される時間は、60～64 歳階級では 160 分で、有業者の同一年齢階級の値より 98 分長い。無業者の配分時間は年齢階級の上昇とともに減少していき、75～79 歳階級では 109 分となる。その減少幅は、70 歳代になって急激に大きくなる。

無業者において仕事等および家事関連の 2 次活動の時間には年齢階級でほとんど差がみられないにもかかわらず、3 次活動の積極的自由時間活動に配分される時間は一貫して減少しており、年齢階級の上昇とともに徐々にその減少幅も大きくなっていることは、加齢による影響ととらえることができるだろう。

また有業者及び無業者の生活時間配分を合わせて考えると、総数において年齢階級の上昇とともに 3 次活動の時間が伸びているのは、高齢者全員が同じように 3 次活動の配分時間を増加させているからではなく、無業者の割合が増加するためであると推察される。

個人のレベルでみると、仕事からの引退によって、大幅に生活時間配分が変化することが推察される。もちろんそれだけでなく加齢による変化も見逃せない。

行動者率及び行動者平均時間の動きから総平均時間について再考してみると、次のようなことが明らかになった。

有業者における家事関連の総平均時間が年齢階級とともに上昇するのは、60 歳代では行動者率の上昇と、行動者平均時間の増大の両方が、70 歳代では行動者平均時間の増大が関係していると推察される。

テレビ・ラジオ・新聞・読書を含めた休養的自由時間活動に対する有業者の時間配分が年齢階級の上昇とともに総平均時間が増加していくのは、行動者率及び行動者平均時間の両者ともに年齢階級があがるにつれて、少しずつではあるが上昇する傾向にあることが関係していると推察さ

れる。積極的自由時間活動に関する時間配分は、項目によってその特徴がやや異なるが、行動者平均時間の変化はあまりみられないか、70歳代後半までみられないことから、行動者率の変化がより強く影響しているように推察される。

無業者の家事関連の総平均時間が、年齢階級が上がるとともに増加するのは、年齢階級の上昇に伴って少しずつ行動者率が低下するものの、行動者平均時間の増加に相殺されるためであると推察されるだろう。

また無業者の休養的自由時間活動の総平均時間は年齢階級の上昇とともにやや増加傾向がみられ、テレビ・ラジオ・新聞・読書の行動者率や行動者平均時間が年齢階級において差がみられないことと合致していない。休養的自由時間活動の総平均時間の年齢階級が上がるとともに総平均時間が増加するのは、休養・くつろぎの行動者率の上昇と70歳代後半の行動者平均時間の増加が影響を与えているものと推察される。無業者の積極的自由時間活動に関する項目については、行動者平均時間が年齢階級の上昇とともに減少していく傾向がみられ、有業者においてあまり変化しなかったことと異なった特徴を示している。

このように有業者、無業者といった属性別にみることで、高齢者全体の平均像とはそれぞれかなり違った特徴が明らかになった。現代の高齢者は多様であり、ひとくくりにできるものではない。今後さらに他の属性にも着目しながら分析を行っていきたい。

## 引用・参考文献

小林和美（2010）「韓国の高齢者の生活時間－生活時間調査データの日韓比較から－」『大阪教育大学紀要』

Vol.58,No.2,pp.1-15

熊澤幸子（2003）「独居後期高齢者に対する生活時間調査：NHK全国調査60歳台と70歳台以上における生活時間の比較」『社会福祉学』Vol.44,pp.149-159

三富紀敬（2006）「高齢者の生活時間」『静岡大学経済研究センター研究叢書』Vol.4,pp.47-53